

東海市大田町にある与五八池と自然観察

東海市立船島小　相　地　　満

水源地としての与五八池

私が東海市の大田小学校に赴任したのは昭和50年4月である。その頃、学校の東から南にのびた木田の丘には赤く立枯れた松の木が目立った。松が皆枯れていくというのであった。赤く立ち枯れる松は松喰虫の被害ということで済まされていたのだが、松がことのほか多かったというこの丘の西側に2箇所今も松が青々と繁っている場所がある。丘の西端にあり、古くから長く絶えることなく湧き出る泉の地に建てられたという由来をもつ長源寺と丘の谷間に作られている溜池、与五八池（上池）の畔である。与五八池は上池と下池からなり、北側が田畠として開け、他を丘で囲まれている。数年前に池の周囲の雑木の伐採が行なわれるまでは、池を一周することすら容易でなく、深閑として不思議な無気味さすら感じさせる静かな池であった。「松は本来、低山や丘陵地の丘から田畠や低湿地、人里に至る接点となるようなところ、地下に清らかな水の流れているところに良く生育しているものであり、松の立枯れは松喰虫の被害だけではなく、そういう環境がなくなっているところに根本的な原因があるのです」と聞いたことがある。長源寺と与五八池に松が今も残っているのを見るにつけ、私はこの言葉をあらためて思い出す。

この地になぜ溜池が作られたのだろうか。大田町は明治になって農村であった木田村と大里村が合併して出来た。両村の中心より北側を大田川が流れ、その水利権争いは大変なものであったという。水量のそう豊富ではない大田川の水だけでは足りず、溜池を必要とした。そこで、木田の丘の地形を利用して、太光寺池、与五八池（上池、下池）が作られる。小学校2年生の社会の学習に「農家のくふう」という単元がある。春、水が動き出した頃、大田小学校のまわりの田に立って水が流れてくる方向を追っていくと、うねうねと遠まわりをしながらやがて与五八池にたどりつく。子供達は下池の一方を塞いだ大きな土手の前に立って水はここから流れてきていたのかと驚く。土手を登って見ると満々と水を湛えた池の向うに更に高く大きな上池の土手が見える。草深いその土手に立てば北側に広がる大田町を望むことが出来る。大田町の田をうるおす水はここから流れているのだということが実感としてよくわかった。更に細かい地図でよく見ると田畠が池から扇状に広がっている部分が残っていておもしろい。

かつて、この与五八池の周辺は自然な水源地として、人間や他の動物達の命を潤す聖なる場所であったかも知れない。与五八池をつつむ木田の丘には縄文前期からの人間の営みのあったことが出土する遺物によって知られている。米作りもまず、与五八池のあるあたりから始まったかも知れない。池の東側の丘からは當時、湧き水があり、湿田となっている。そういうところがまず、自然の水田となったことが充分考えられる。農事、特に水に関した年中行事や祈禱がこの池を中心として行なわれたかも知れない。丘の上にある雨尾神社や池の西側にある小さな祠、池の北側で行なわれたという正月のドンド焼などが、その名残りをとどめている。池はいつごろこのような溜池として出来たのか、それはわからない。だが、池が出来る以前からこの地が自然な水源地としてあった

ことは充分考えられるのである。

自然観察地としての与五八池

(1) 理科クラブの活動

私が与五八池の自然に興味を持ち始めたのは、顧問をしていた理科クラブの活動の中心を自然観察においた昭和55年度からであった。それ以前の情報としては、池に水草がたくさんあるということ(50年)カワセミが来ていた(51年)。池の水を全部ぬいたところウナギ、ナマズ、コイ、モツゴ、フナなどがたくさんいた(51年)。トンボや昆虫の種類が非常に多い(52年)ということぐらいであった。理科クラブの活動を自然観察においた理由は当時、校内に郷土資料館を作ることとなり地域の自然学習の資料を集める必要があったからである。子供達をつれてこの池に出かけた。ツリガネニンジン・ワレモコウ・アケビ・ミツバアケビ・ムラサキシミヅ・カラスウリ・ツルウメモドキ・ヤマモモ・ヒサカキ・シャシャンポ・アラカシ・タブ・カクレミノ・ヤブニッケイ・アベマキ・コナラ・クサギ・アカメガシワ・ショウブ・ヒシ・ママチャヅル・ミゾソバ・ヤブガラシ・ヤブコウジ・イヌビワ・ホソバイヌビワ・イシミカワ・サワフタギ・ガマズミ・カマツカ・イスノキ・ヤブツバキなどの植物、オオケマイマイ・マルタニシ・カラスガイ(?)・コジュケイ・キジ・カイツブリ・キジバト・セキレイなどが観察され、子供達の手で記録されていった。記録されたもの一部は「観察者」という機関紙にまとめられた。観察した結果をもとに自然観察路の設定と資料づくりをはじめていたが中途になっている。

(2) 親子自然観察会

親子自然観察会はもとP.T.A.保健体育部秋の行事の一つとして体力測定やフォークダンスなどをしていたものを人が集まらないからという理由でなればやけっぱちになって外へ出てハイキングでもしよう。どうせ歩くなら木とか草の名前を憶えながら歩こうということになって始まったものである。それが好評を呼び、30名から60名、60名から100名と年をへるごとに多数の参加があり、58年度は150名を越える大盛況ぶりを発揮したのだった(その勢いで、P.T.A.は親子でカマボコ板をあつめ木に名札をつける活動を始め、新聞でも報道された)。例年、木田の丘を中心としたコースを選び、事前に資料を作ったり、荷ふだに植物名を書いてつるしておいたりしていたが、58年度は特に与五八池を中心にくわしく歩いた。というのも近年、この池の自然環境の悪化がはなはだしく、静岡大学の橋本先生に見ていただいた時も「あと一年二年といったところではないか」という程のものであり、その姿をしっかりと見ておいて欲しかったからである。

この池の自然環境の悪化は56年ごろから急速に進んでいる。まさに3ヶ月おきぐらいのはやさで見る度に悪くなるといって良い。原因是54年に愛知用水が使われるようになり、池の役割が少なくなったこと、56年ごろからブラックバスが繁殖をはじめ、ルアーによる釣り人が集まっていること、数年後には東西南北からのびてきている新しい道路がこの池の近くで十字に交差する計画が進められていることなどによる。かつて自然な地に池が作られたとき、それは確かに自然の破壊ではあったが、そこに棲む生物層は豊かになった。だが今日の溜池の自然の破壊は、何を、我々にもたらしてくれるだろうか。観察を続けていきたいと思う。